

身近なまちの風景物語(2)

消える橋

初めての道に行く時、見逃すまいという緊張感と、もし見かけたら、という高揚感が入り交じる。「？」となるものを見ると頭の中を妄想が駆け巡り、「！」となるものを見ると心拍数があがる。

歩いている時は、それでも少しは落ち着ける。振り返るなり、もう一度戻るなりして、確認することができるからだ。でも、車の場合、なかなかそうはいかない。特に自分が運転していないと、言い出せない。

初めて久慈川沿いの道を北上した際もそうだった。車窓から見下ろした橋の存在に気づいた時は、「！」だった。久し振りに見た「もぐり橋」だった。というより、おそらく「もぐり橋」だろうと想像したというのが正しい。

これは確かめるしかない、そう思った。その時は先を急ぎ、運転は他の人に任せていたので、車を停めてもらうことはできなかった。

自分の運転で同じ道に行く機会に、あらためてその場所へと足を運んだ。思った通りだった。

周囲の土手に比べて橋の位置は低く、水面から近い。親柱はなく、欄干も質素である。この橋は増水時には冠水し、橋面が水没することを前提とした橋だった。

橋脚や欄干が、川上から流れてくる流木などをせき止めると、押し寄せる多量の水と相俟って橋を損傷してしまう。そのため、川上からの流れをせき止めず、いかに下流に流すか、橋を障害物にしない工夫がなされている。

こうした橋は、一般的に「もぐり橋」「潜水橋」などと呼ばれる。高知県の四万十川では「沈下橋」として観光名所にもなっている。調べてみると、久慈川水系にはいくつも存在する。茨城県内では「地獄橋」とも呼ばれているらしい。

車が通れる橋でも、幅は狭く一台しか通れない。対向車がある時は互いに譲り合う必要がある。直線でも左右に余裕がないため、慣れないと運転は怖い。

橋のような土木構造物は、それ自身が自己主張するような存在感は必要ない。その背景にある、蛇行する河川や稜線が続く山並みが風景の主役である。人工物である橋には、雄大な自然を損なわない点景、あるいは添景が求められる。自然界にはない橋脚や橋桁のような直線が風景に緊張感を醸し出し、背景を引き立てる。

「もぐり橋」は、自然と対峙しない暮らしの営造物である。短期間とはいえ冠水して橋の通行ができなくなることもある。それでも地域の人々はこの橋を受け入れている。

天候の良い時分に橋の真ん中に立つ時、自然に抱かれた中心にいるようで、心地よい風を肌で感じる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）